

小児看護学におけるディベート学習の導入とその評価

中尾 優子¹・森藤香奈子¹・荒木 美幸¹
佐々木規子¹・山本 直子¹・滝川由香里²

要 旨 小児看護学教育にディベート学習を導入し、学生による質問紙評価を行った。結果、学生の大部分がディベートを成功したと感じ、次の参加の機会を希望していた。特に平成24年の2年生は平成25年の2年生に比較し、有意に参加希望や満足度が高かった。討論が特に活発であったことが成功体験として考えられ、その背景には学生の学習時間の準備性があったことが示唆された。

保健学研究 26 : 47-51, 2014

Key Words : ディベート, 小児看護学, 学習効果

(2013年9月2日受付)
(2013年10月17日受理)

1. はじめに

昨今、予測困難な時代において、今後の変化に対応するための基礎力と将来に活路を見いだす原動力として、有為な人材の育成や未来を担う学術研究の発展が切望され、大学改革が期待されている。新たな未来を築くために大学教育の質的転換が望まれているのである¹⁾。

本大学でもジェネリックスキル育成への大学教育の転換を目指し、平成24年度入学生より、教養教育科目にモジュール科目を取り入れ、アクティブラーニングを取り入れた授業のアクティブ化が実施されている^{2,3)}。アクティブラーニングは、教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学習者の能動的な学習への参加を取り入れた教授・学習法の総称であり、グループ・ディスカッション、グループ・ワーク、プレゼンテーション、ディベートなどが取り入れられる⁴⁾。

本保健学専攻看護学講座では、専門科目のひとつである小児看護教育において、考え、表現する力を高めることを目標に、ディベート学習を実施している。今回、平成24年2年生と平成25年2年生に対し、質問紙調査によるディベート学習の評価を行い、ディベート学習定着のための課題を明らかにした。

2. 研究方法

1) 対象

小児看護学のディベート講義に参加した平成24年の2年生68名、平成25年の2年生70名

2) 研究期間

平成24年5月～平成25年7月

3) データ収集方法と倫理的配慮

ディベート終了後、ディベートの満足感、学習の負担感と事前学習時間、ディベートの受けとめ方（講義への導入について、成功の有無）について学生に質問紙による評価を実施した。質問紙は無記名とし、個人が特定されないように配慮した。また、学生へ結果を報告することを伝え、研究以外にはその結果を使用しないことを口頭で説明し、発表することの許可を得た。

4) 研究の分析

ディベートの満足感、学習の負担感、ディベートの受けとめ方についてはマン・ホイットニ検定、学習時間についてはt検定を行った。

3. ディベートの実際

1) 看護専門科目中でのディベートの位置

平成23年度入学生（平成24年2年生）の看護専門科目の中の領域科目において、小児関連科目は4科目であり、小児看護学Ⅰ・Ⅱ、小児と健康学、小児看護学実習である。

平成24年度入学生（平成25年2年生）の看護専門科目の中の領域科目において、小児関連科目は6科目であり、小児看護学Ⅰ・Ⅱ、小児と健康学、小児看護学実習Ⅰ・Ⅱ、成育看護学である。2年生前期で小児看護学Ⅰを学び、前期の期間内に小児看護学実習Ⅰの保育所実習を実践する。小児看護学Ⅰの授業のねらいは「『子どもとは？私たち看護師の役割は？』とし、小児期各期の特徴、看護が述べられ、課題の発見と具体策を列記することができる」としている。平成24年度のカリキュラム改正により、小児看護学Ⅰの授業時

1 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科保健学専攻看護学講座

2 長崎女子短期大学

間数は30時間から15時間に減少した。ディベートは、討論までに十分な学習時間があることと、自主的学びがその後の講義に生かされるように小児看護学Ⅰの前半の4回目の授業時間とした(表1, 2)。

2) ディベートの構成メンバー

司会 1名
 討論者は是側, 非側各 5名
 メイン審査 5名
 タイムキーパー 2名
 審査(上記以外の)学生50名(平成24年2年生)
 学生52名(平成25年2年生)

3) 展開方法

(1) 実施までの準備

第1回授業時, ディベートについての講義方法について具体的に説明を行い, ディベート準備のためにレポート課題を提示する。今回のディベートテーマは, 「日本は子どもを大切にしている国である。是か非か」であった。学籍番号末尾により偶数か奇数かで参加者を2分し, 代表者にどちらかの選択権を与え, 話し合いの結果, ディベート当日の討論側を決定する。司会, 討論者については希望者を募る(平成24年は司会1名, 討論者2名の希望。平成25年は司会1名, 討論者5名の希望があった)。

(2) 実施

最終討論者を決定し, 授業開始40分後からのディベート開始に合わせ, 作戦タイムを確保する。ディベート開始までの間に, 教員が司会, タイムキーパー, メイン審査員との打ち合わせを行い, 会場準備は全員で行う。実際の順序は以下の内容で行った。

- ① 是側の基本討論
(1名が代表で行う。2分以上3分以内)
- ② 非側の基本討論
(1名が代表で行う。2分以上3分以内)
- ③ 作戦タイム(2分)
- ④ 非側の交互討論
(挙手し, 司会が当てたとき1名のみ発言できる)
- ⑤ 是側の交互討論
(挙手し, 司会が当てたとき1名のみ発言できる)以後, ④と⑤を繰り返し, 是側で終わる(交互討論14分)
- ⑥ 作戦タイム(3分)
- ⑦ 是側の最終討論
(1名が代表で行う。1分以上2分以内)
- ⑧ 非側の最終討論
(1名が代表で行う。1分以上2分以内)
- ⑨ 審査・講評
メイン審査員持ち点20点, その他の審査員持ち点2点とし, 是側, 非側の獲得点を合計し, 審査結

表1. 小児看護学Ⅰ学習(平成24年)

回	学習課題	学習の内容並びに方法
1	小児期各期の特徴(1)	小児期の区分, 成長・発達の一般的原理
2	小児期各期の特徴(2)	小児期各期の形態的・機能的発達
3	ヘルスアセスメント(1)	小児のヘルスアセスメント1(身体発育の評価)
4	ヘルスアセスメント(2)	小児のヘルスアセスメント2(精神・運動機能の評価)
5	小児の環境(1)	日本の子どもと世界の子ども
6	小児の環境(2)	演習: ディベート
7	小児期各期の特徴(3)	小児期各期の心理・社会的発達1(認知, 情緒, 社会性, コミュニケーション)
8	小児期各期の特徴(4)	小児期各期の心理・社会的発達2(遊びの発達, 各期の発達課題)
9	小児の成長・発達と看護(1)	新生児・乳児の成長, 発達と看護
10	小児の成長・発達と看護(2)	年少幼児の成長, 発達と看護
11	小児の成長・発達と看護(3)	年長幼児の成長, 発達と看護
12	小児の成長・発達と看護(4)	学童期の成長, 発達と看護
13	小児の成長・発達と看護(5)	思春期の成長, 発達と看護
14	小児の環境(3)	健康増進のための政策と社会制度
15	小児看護総集編	まとめ
16	試験	試験

表2. 小児看護学Ⅰ学習(平成25年)

回	学習課題	学習の内容並びに方法
1	小児期各期の特徴(1)	小児期の区分, 成長・発達の一般的原理
2	小児期各期の特徴(2)	小児期各期の形態的・機能的発達
3	ヘルスアセスメント	小児期各期の心理・社会的発達 身体発育の評価, 精神・運動機能の評価
4	小児の環境	演習: ディベート(日本の子どもと世界の子ども)
5	小児の成長・発達と看護(1)	新生児・乳児の成長, 発達と看護
6	小児の成長・発達と看護(2)	幼児の成長, 発達と看護
7	小児の成長・発達と看護(3)	学童期・思春期の成長, 発達と看護
8	試験	試験

表3. デイバートの受けとめ方

n (%)

	強くそう思う		そう思う		思わない	
	H24年	H25年	H24年	H25年	H24年	H25年
講義へ取り入れた方がよい	13 (19)	12 (17)	53 (78)	49 (70)	2 (3)	9 (13)
成功した	22 (32)	16 (23)	44 (65)	47 (67)	2 (3)	7 (10)
また参加したい*	12 (18)	5 (7)	53 (78)	54 (77)	3 (4)	11 (16)

*平成24年,平成25年の学生群間 $p < 0.01$

果が発表され,メイン審査員より論評が行われる。実施後に,持参したレポートの回収とデイバート参加についての調査を実施し,終了する。

平成24年の2年生の主な論点は,「教育制度」「母子への政策」「医療福祉」であり,活発な討論が繰り返された。平成25年の2年生の主な論点は,「貧困率」「皆保険制度」「教育制度」であり,是側の迫力に非側が押されている印象が残った。

(3) 実施後の振り返り

デイバート学習への参加についての学生からの評価結果について,資料を作成し学生へフィードバックを行った。

4. 学生の評価

1) 参加満足度について

平成24年の学生は大満足14名(21%),満足48名(71%),やや不満5名(7%),無記入1名(1%)で,不満と答えたものはいなかった。「両方の意見がよく聞かれ,どちらも納得のいく意見であった」「(討論者として)自分の意見が言えた」と述べていた。平成25年の学生は,デイバートの参加満足度は,大満足10名(14%),満足46名(66%),やや不満12名(17%),不満2名(3%)であった。大満足,満足と答えた学生は,「自分と異なった意見を聞くことができた」「同じデータでも様々な見方があることを実感した」「デイバートの討論ごとに,是非を真剣に考えることができた」と述べ,やや不満,不満と答えた学生は,「主観的な情報に頼っていた」「もっと整理して,ポイントを絞って的確に発言してほしかった」「(討論者であったが,)調べが浅く,意見として思うように発言できなかった」と述べていた。参加満足度については,平成24年,平成25年の2年生間で $p = 0.045$ で有意な差がみられ,平成24年の学生が平成25年の学生に比較し,満足度が高かった。

2) 事前学習の負担感

学生のデイバート実施前のレポートを含めた事前学習の負担感について尋ねると,平成24年の学生は,かなり負担12名(18%),少し負担51名(75%),負担なし5名(7%)であった。実際の学習時間は,4.7(SD3.6)時間であり,最少1時間,最大24時間であっ

た。平成25年の学生は,かなり負担12名(18%),少し負担54名(78%),負担なし3名(4%)であった。実際の学習時間は,3.3(SD1.4)時間であり,最少30分,最大8時間であった。また,平成25年学生の学習で利用した資源については,全員がインターネットを使用し,本11名(16%),テレビ・ビデオ11名(16%),新聞5名(7%),雑誌1名(1%),人に尋ねた16名(23%)であった。事前学習の負担感に対する学年の差は見られなかったが事前学習時間は平成24年が有意に($p = 0.003$)多い時間,学習をしていた。

3) 学生のデイバートに対する受けとめ方(表3)

平成24年の学生は,『今後の講義へ取り入れた方がよいか』については,強くそう思うとそう思うで,66名(97%)であった。『デイバートは成功したか』については,強くそう思うとそう思うで66名(97%),思わないが2名(3%)であった。『機会があったらまた参加したいか』は,強くそう思うと思うで65名(96%)であった。平成25年の学生は,『今後の講義へ取り入れた方がよいか』については,強くそう思うとそう思うで,61名(87%)であった。『デイバートは成功したか』については,強くそう思うとそう思うで63名(90%),思わないが7名(10%)であった。『機会があったらまた参加したいか』は,強くそう思うと思うで59名(84%)であった。参加の希望については,有意($p = 0.007$)に平成24年の学生の割合が高かった。

5. 考察

1) デイバート学習の導入について

デイバート学習の体験を学生に尋ねると,例年学生の4割未満しか手が挙がらない。学生の大多数が今回のデイバートが初めてであった。しかし,デイバート方法や当日のメンバーへの役割について,学生へ十分な説明を行うことで,1コマ(90分)の時間内にデイバートを実施することができ,論評まで行えることができる。準備から整理まで全員で実施し,討論に参加できない学生が傍観者にならないように,メイン審査員20点の持ち点にそれ以外の学生2点とし,すべて全員参加の形にした。このことは,9割以上の学生がデイバートを成功したと述べ,また『機会があったらまた参加したいか』においても8~9割の学生がそう

思うと答えたことにつながったと考える。全体的に満足度も高く、ディベートの形としては成立できていると言える。

さらに、学習時間による学年年度の学生の差がみられたことから学生の学習準備時間の背景を配慮しておく必要がある。平成24年の学生は、準備時間を講義時間内に70分用意することができた。これは、学年年度の準備時間の差として表れていると考えられた。根拠になる資料準備は重要であり、平成25年の学生が「主観的意見に偏っていた」と述べていたようにディベートで育成される9つの能力のひとつ「テーマに関する証拠・証明の資料を探し、それをもとに相手を説得することにより、自分の立場と意見が明らかになる」⁵⁾への影響が考えられた。ディベートの導入にあたっては、学生の準備性を充分に考えておく必要がある。

2) ディベート学習の定着化について

平成24年学生は、平成25年学生より有意に次の機会への参加希望が高く、満足度も高かった。意見が、是側か非側のどちらかに押されず、討論が活発に持続したことがこの結果につながったのではないかと考える。本大学では平成24年より講義のアクティブ化が実践され、グループワーク（PBLやTBL含む）の導入により、集団で「考える力」の素地が育ち始めている。引き続き行われる専門科目の教育においても参加型の学習が継続して行われ、討議の成功体験を重ねることが重要と考える。学生評価の中では、全体として事前学習や論証していく能力の必要性を強く感じ、ディベート学習を肯定的に受けとめていた。また、ディベートには、テーマの選択にともなう社会的関心、テーマについてのデータや資料を収集するリサーチ力、収集したデータから自分たちの主張を紡ぎ出すための構成力や論理性、さらにはチーム内でテーマと主張を深めていくための討議能力、最終的には自分たちの思考に言語表現を与え、それを説得力あるプレゼンテーションに導く表現力等、総合的学習としての効果が示されている^{6,7)}。このことを学生に伝えておくことが必要である。さらに、宮里は、日本国内の看護基礎教育におけるディベートの取り組みに関する文献検討の中で、「ディベート能力や、ディベート論題に関する知識の習得状況を評価するには、学生の主観的評価を取り入れるだけでは充分とはいえない。」と、述べている⁴⁾。回を追うごとのディベート学習の評価はもちろん、学生自身の関心ごとへの学習の深め方や発言力など総合的に評価していくことが望まれる。ディベートの定着化の

ためには、ディベートによる学習効果について客観的データを示していくことも重要であろう。

6. 結論

小児看護学のディベート学習は、学生の大部分が成功したと感じ、次の参加の機会を希望していた。ディベートの定着化に向け、学生の準備性を配慮し、成功体験の機会を重ねることが必要である。

7. おわりに

ディベートの機会を増やし、論破していく力を育成することが重要であるが、ディベート方法は体験学習であるため、テーマによっては、青年期にある学生の心情や気持によりそうことを忘れず教授していくことが重要である。失敗体験、成功体験が次の教育に生かされるような関わりを行っていく必要がある。

引用文献

- 1) 「文部科学省ホームページ」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm
2013.8.30
- 2) 山地弘起, 川越明日香: 国内外におけるアクティブラーニングの組織的実践事例, 長崎大学 大学教育機能開発センター紀要, 3: 67-85, 2012.
- 3) 「長崎大学ホームページ」
http://www.redc.nagasaki-u.ac.jp/teacher/Int_yamaji.pdf
アクティブラーニングの実質化に向けて
2013.8.29
- 4) 宮里智子, 伊良波理恵, 高橋幸子, 金城 忍, 嘉手苺英子: 日本国内の看護基礎教育におけるディベートの取り組みに関する文献検討-取り組みの実際と教育効果および課題-. 沖縄県立看護大学紀要, 14: 81-88, 2013.
- 5) 佐藤みつ子, 宇佐美千恵子, 青木康子: 体験中心の学習. 看護教育における授業設計: 医学書院, 東京, 2009, 172-177.
- 6) 服部 裕: ディベートによる学生参加授業の試み-「総合的学習」におけるディベートの可能性-. 秋田大学教育文化部教育実践研究紀要, 25: 133-143, 2003.
- 7) 煙山晶子, 小笠原サキ子: 老年看護学における教育効果の検討-ディベートの教育効果について-. 秋田大学医学部保健学科紀要, 13 (2): 50-57, 2005.

Introduction and Evaluation of the Debate on Pediatric Nursing Class

Yuko NAKAO¹, Kanako MORIFUJI¹, Miyuki ARAKI¹
Noriko SASAKI¹, Naoko YAMAMOTO¹, Yukari TAKIGAWA²

1 Nagasaki University Graduate School of Biomedical Sciences

2 Nagasaki Women's Junior College

Received 2 September 2013

Accepted 17 October 2013

Abstract The Debate on Pediatric Nursing class was introduced, and an evaluation questionnaire was completed by students. Students thought that the debate was successful and wished for the opportunity to participate again. Second-year nursing students in the 2012 academic year in particular had significantly high participation hopes and satisfaction in comparison with second-year students in the 2013 academic year. The discussion was considered to be a particularly successful experience, and it was suggested that students learned a lot from preparing for and participating in the class.

Health Science Research 26 : 47-51, 2014

Key Words : Debate, Pediatric Nursing, study effect